

学生生活における携帯電話の使用状況と問題点について

Student Use of Mobile Phones and Related Problems

宇留野 諒子 佐藤 啓子

(Ryoko URUNO Keiko SATO)

I. はじめに

現代の短期大学部の女子学生の生活習慣を見ると、携帯電話の存在を無視することはできない。彼女らは四六時中携帯電話で友人とメールをやり取りし、あるいはブログとよばれる公開日記を通して自分の考えや悩みを消化している。目白大学短期大学部においても学生たちの行動は携帯電話のあり方によってその生活習慣が大きく影響を受けたに違いない。そこで、目白大学短期大学部の学生の携帯電話による生活の変化を明らかにするのが本論文の目的である。

II. 調査の対象および調査方法

調査の対象は東京都新宿区にある目白大学短期大学部生活科学科に2008年に在学中の女子学生30人である。その内訳は秘書・ビジネスコース21人、ファッション・デザインコース4人、製菓学科5人である。アンケート調査による内容は、携帯電話の使用時間、誰とどのようなときに携帯電話を使用しているかなどである。

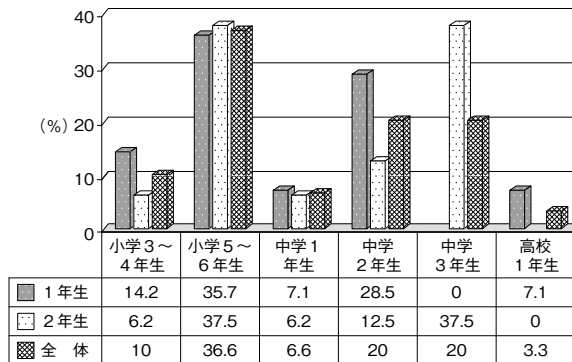
III. 結果

1. 携帯電話の使用開始時期

携帯電話を持ち始めた時期について、目白大学短期大学部1年生（平成20年4月入学：以降この語省略）では小学3～4年生が14.2%、小学5～6年生が35.7%、中学1年生が7.1%、中学2年生が28.5%、中学3年生が0%、高校1年生が7.1%であった。また、2年生では小学3～4年生が6.2%、小学5～6年生が37.5%、中学1年生が6.2%、中学2年生が12.5%、中学3年生が37.5%、高校1年生が0%であった。全体では、小学3～4年生が10%、小学5～6年生が36.6%、中学1年生が6.6%、中学2年生が20%、中学3年生が20%、高校1年生が3.3%であった（図-1）。小学1～2年以前および高校2年以降に携帯電話を持ち始めたというものは、1年生、2年生ともいなかった。そのため、図-1では表記を省いている。携帯電話を使い始めた時期は小学5～6年生の時がもっとも多く、小学校中学年ごろから高校にあがる前にほとんどの学生が携帯電話を使い始めていることがうかがえる。

2006年に実施された小学生から高校生までの男女を対象にしたgooリサーチの『「子どもの携帯電話利用状況」に関する調査結果』によると、携帯電話を持ち始めた時期は39.2%と中学

図-1 携帯電話の使用開始時期



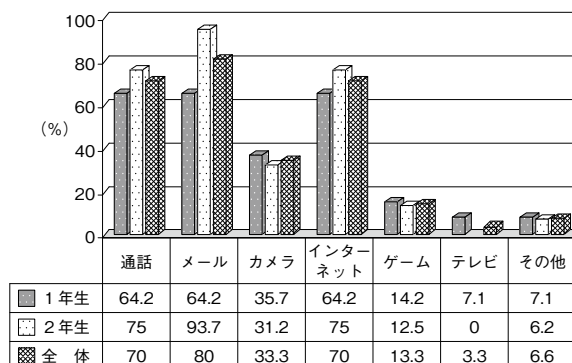
入学後に最も多く、次いで34%が高校入学後である¹⁾。これと比較すると、本学の学生はやや携帯電話を持ち始める時期が早いようである。あるいは、2年間という長くはない期間において、急速に携帯電話がより低年齢にまで普及したことを示すといえる。

2. 携帯電話でよく利用する機能

携帯電話でよく利用する機能について（複数回答）は、1年生では通話、メール、インターネットが64.2%、カメラが35.7%、ゲームが14.2%、テレビが7.1%、その他が7.1%であった。2年生では通話が75%、メールが93.7%、カメラが31.2%、インターネットが75%、ゲームが12.5%、テレビが0%、その他が6.2%であった。全体では、通話が70%、メールが80%、カメラが33.3%、インターネットが70%、ゲームが13.3%、テレビが3.3%、その他が6.6%であった。その他には電子マネー、音楽などがあげられた（図-2）。1年生、2年生とも通話、メール、インターネットの利用が多いことがわかる。とくに2年生ではほぼ全員の学生がメールをよく利用しているようである。

博報堂生活総合研究所：中村恭子・原田陽平著『10代の全部』において2004年に16～19歳の女子に行われた『10代の意識と行動に関する調査』では、通話とメールの利用比率は通話が

図-2 携帯電話でよく利用する機能



21.3%、メールが78.7%と圧倒的にメールが多い⁽²⁻¹⁾。本調査では比率や回数は問うていないが、モバイル・コンテンツ・フォーラム監修『ケータイ白書2008』の全国調査でも携帯電話で1日に1回も通話しない割合が34.2%、3回未満は51.1%であり、携帯電話で通話を頻繁に行う割合は低い⁽³⁻¹⁾。それに対して本学学生はよく通話するというような印象を受ける。また、インターネットに関しても週1回未満の利用が36.9%、週1～3回未満が21.2%であることからすると、本学の学生はインターネットを利用することが多いという特徴が考えられる。

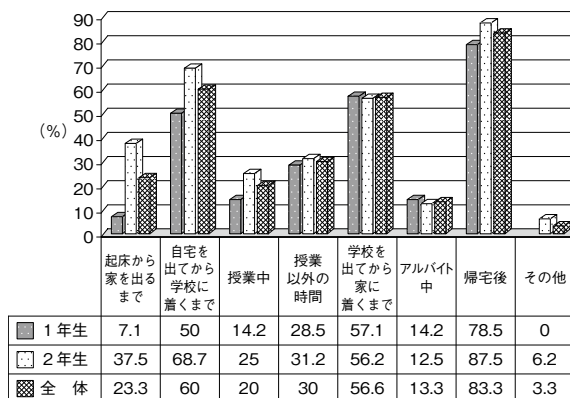
3. 携帯電話を利用することが多い時間

携帯電話を利用することが多い時間について（複数回答）は、起床から家を出るまでが1年生は7.1%、2年生は37.5%、全体では23.3%であった。具体的には6時～8時など午前中が多かった。自宅を出てから学校に着くまでは、1年生が50%、2年生が68.7%、全体が60%であった。具体的には、1年生は7時～9時が登校時間にあたるのかその時間に集中している。2年生は午前中の8時～12時の間に当てはまる回答をしたものが8人ともっとも多く、午後では12時～13時が2名などであった。さらに、1年生よりも2年生は各項目の時間帯がそれぞれ異なっており、授業に束縛されない時間帯が多く、またそれぞれの時間の割り当て方が個々に違っている様子がうかがえる。起床から家を出るまでや自宅を出て学校に着くまでといった午前中の時間に2年生が多いのもそのためであろう。

授業中に携帯電話を使用することが多いというものは、1年生が14.2%、2年生が25%、全体が20%であった。授業以外の時間では、1年生が28.5%、2年生が31.2%、全体が30%であった。授業以外の時間は、具体的には12時～13時の昼休みの時間、16時以降の授業終了後の時間などで、いつもというものも1名いた。部活（サークル）中というものは1年生、2年生とも1人もいなかった。そのため、図-3に表記していない。

学校を出てから家に着くまででは、1年生が57.1%、2年生が56.2%、全体は56.5%であった。1年生、2年生ともに16時～20時の間に当てはまる回答をしたものが、1年生6名、2

図-3 携帯電話を利用することが多い時間

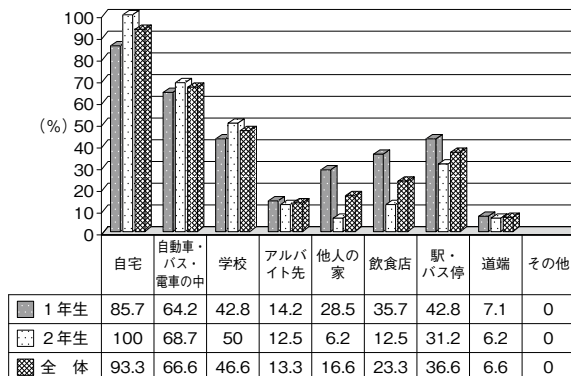


年生3名でもっとも多かった。アルバイト中は、1年生14.2%、2年生12.5%、全体では13.3%であった。帰宅後では、1年生は78.5%、2年生は87.5%、全体は83.3%であった。1年生では19時～24時の間に当てはまる回答をしたものが6人ともっとも多く、日付をまたいで利用するものは2名、もっとも遅くまで利用するのは午前2時までだった。2年生では18時～24時の間に当てはまる回答をしたものが8名でもっとも多く、日付をまたいで利用するものが2名、もっとも遅い時間まで利用するのは午前1時までだった。その他ではほぼ1日というものが2年生に1名いた（図-3）。1年生、2年生とも学校から家までの移動中と自宅にいる時間に利用することが多いようだが、授業中やアルバイト中など何かをしているときにも携帯電話を利用しているようである。

4. 携帯電話を使用することが多い場所

携帯電話を使用することが多い場所について（複数回答）は、1年生は自宅が85.7%、自動車・バス・電車の中が64.2%、学校が42.8%、アルバイト先が14.2%、他人の家が28.5%、飲食店が35.7%、駅・バス停が42.8%、道端が7.1%、その他が0%であった。また、2年生は自宅が100%、自動車・バス・電車の中が68.7%、学校が50%、アルバイト先が12.5%、他人の家が6.2%、飲食店が12.5%、駅・バス停が31.2%、道端が6.2%、その他が0%であった。全体では、自宅が93.3%、自動車・バス・電車の中が66.6%、学校が46.6%、アルバイト先が13.3%、他人の家が16.6%、飲食店が23.3%、駅・バス停が36.6%、道端が6.6%、その他が0%であった（図-4）。前述の結果でも記したように、1年生、2年生とも自宅で携帯電話を使用することが多く、次いで自動車・バス・電車の中といった移動中が多いようである。

図-4 携帯電話を使用することが多い場所



5. 携帯電話の代金

携帯電話の代金を払っているのは、1年生の50%が親、14.2%が親と自分で分け合う、28.5%が自分であった。2年生では43.7%が親、12.5%が親と自分で分け合う、43.7%が自分であっ

た。全体としては46.6%が親、13.3%が親と自分で分け合う、40%が自分であった（図-5）。

『10代の意識と行動に関する意識調査』によると、携帯電話の料金を払っているのは親がすべて払うが63.6%、親からもらったお小遣いの中から、自分で払うが7.6%、アルバイトなどで自分で稼いだお金から、自分で払うが15.7%、親と自分の両方で払っているが11.6%、その他が1.5%である⁽²⁻²⁾。親からもらったお小遣いの中から、自分で払うとアルバイトなどで自分で稼いだお金から、自分で払うを合わせても親がすべて払うの半数にとどまっており、1年生はほぼ似たような結果になっている。しかし、2年生では親が払う割合と自分で払う割合は半々になる。2年生になってくると、本学学生は携帯電話の代金を自分で払う割合が増えてくるようである。

1 ヶ月に払う携帯電話の代金を書いてもらったところ、1年生は3,000円未満が0%、3,000～5,000円未満が0%、7,000～10,000円未満が28.5%、10,000～15,000円未満が50%、15,000～20,000円未満が0%、20,000円以上が7.1%、わからない（不明）が14.2%であった。また、2年生は3,000円未満が0%、3,000～5,000円未満が0%、5,000～7,000円未満が6.2%、7,000～10,000円未満が25%、10,000～15,000円未満が56.2%、15,000～20,000円未満が0%、20,000円以上が0%、わからない（不明）が12.5%であった。全体では3,000円未満が0%、3,000～5,000円未満が0%、5,000～7,000円未満が3.3%、7,000～10,000円未満が26.6%、10,000～15,000円未満が53.3%、15,000～20,000円未満が0%、20,000円以上が3.3%、わからない（不明）が13.3%である（図-6）。

『ケータイ白書2008』によると、全国では3,000円未満が7.6%、3,000円～5,000円未満が19.8%、5,000～7,000円未満が19.4%、7,000～10,000円未満が24.4%、10,000～15,000円未満が12.3%、15,000～20,000円未満が3.3%、20,000円以上が2.6%、わからない（不明）が10.8%である⁽³⁻²⁾。7,000～10,000円未満が多いことからみると、本学学生の1 ヶ月に払う携帯電話の

図-5 携帯電話の代金を払っているのは？

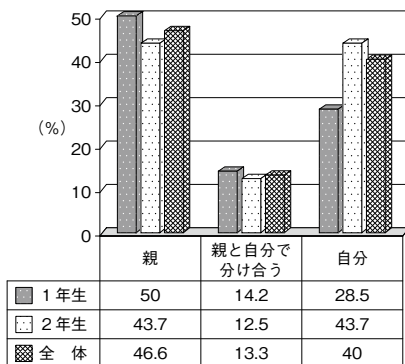
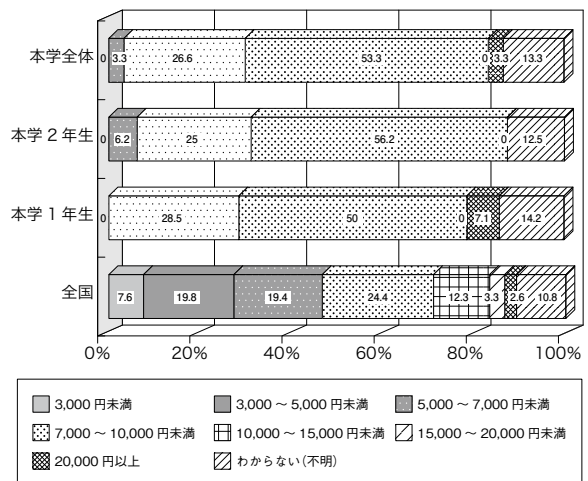


図-6 1 ヶ月に払う携帯電話代金

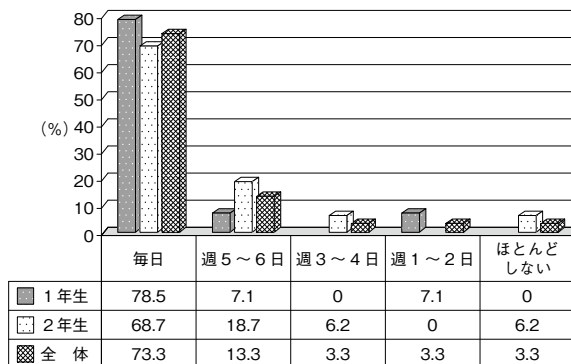


代金は1年生、2年生とも10,000～1,5000円未満が多く、やや全国より高額である。近年、ポケット通信料は定額化されているので、通話料の多さ、またはコンテンツ使用料が1ヶ月の使用料金を引き上げていることが考えられる。

6. 携帯電話のメールの頻度

携帯電話のメールの使用頻度については、1年生では毎日が78.5%、週5～6日が7.1%、週3～4日は0%、週1～2日は7.1%、ほとんどしないが0%であった。2年生では毎日が68.7%、週5～6日が18.7%、週3～4日が6.2%、週1～2日が0%、ほとんどしないが6.2%であった。全体では毎日が73.3%、週5～6日が13.3%、週3～4日が3.3%、週1～2日が3.3%、ほとんどしないが3.3%であった(図-7)。1ヵ月単位の頻度で回答したものはいなかった。そのため、図-7では表記を省いている。1年生、2年生ともほとんど毎日メールを使用しているようである。

図-7 携帯電話のメール使用頻度



7. 携帯電話のメールに費やす時間

携帯電話でメールをするのに1日に費やす時間を尋ねたところ、1年生は1時間未満が7.1%、1～2時間が35.7%、3～5時間が14.2%、10時間以上が7.1%であった。2年生は1時間未満が12.5%、1～2時間が37.5%、3～5時間が18.7%、10時間以上が6.2%であった。全体では1時間未満が10%、1～2時間が36.6%、3～5時間が16.6%、10時間以上が6.6%である。もっとも少ない時間をあげたものは10分、もっとも多い時間をあげたものは12時間だった(図-8)。

1日の送信メール回数については、1年生は1～10回が35.7%、11～50回が7.1%、51～100回が21.4%であった。2年生は1～10回が64.2%、11～50回が28.5%、51～100回が0%であった。全体では1～10回が46.6%、11～50回が16.6%、51～100回が10%であり、もっとも少なかったのは1回、もっとも多かったのは100回だった(図-9)。

1日の受信メール回数については、1年生は1～10回が42.8%、11～50回が7.1%、51～100回が21.4%であった。2年生は1～10回が50%、11～50回が31.2%、51～100回が0%であった。全体では1～10回が46.6%、11～50回が20%、51～100回が10%であり、もっとも少なかったのは1回、もっとも多かったのは100回だった(図-10)。

1日の携帯電話メールの送受信回数は平均すると47.5回であった。小林哲生・天野成昭・正高伸男著『モバイル社会の現状と行方―利用実態にもとづく光と影』で2005年に実施された『ケータイの使用実態に関する調査』から本学学生に近い大学世代の18～22歳の女子の項目をみると、1日あたりのケータイメールの送受信頻度は平均35.1件である⁴⁾。この結果からすると、本学の学生はそれよりも10回以上多くメールのやりとりをしているようだ。

8. よくメールをする相手

携帯電話でよくメールをする相手(複数回答)は、1年生は学外の女友達が92.8%、学内の女友達が50%、学外の男友達が50%、学内の男友達が7.1%、恋人が21.4%、母親が57.1%、父親が14.2%、兄弟姉妹が14.2%、祖父母が7.1%であった。2年生は学外の女友達が100%、学

図-8 携帯電話のメール1日の使用時間

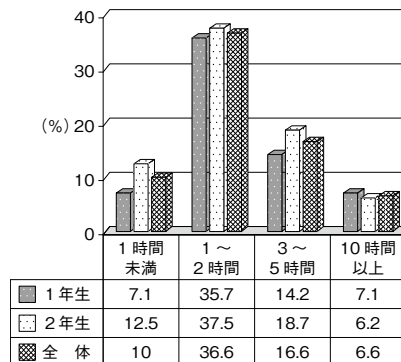


図-9 1日の送信メール回数

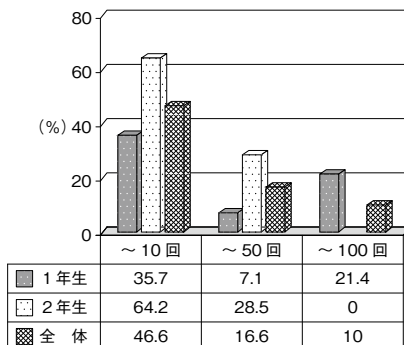
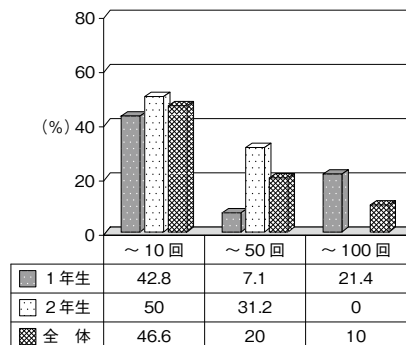
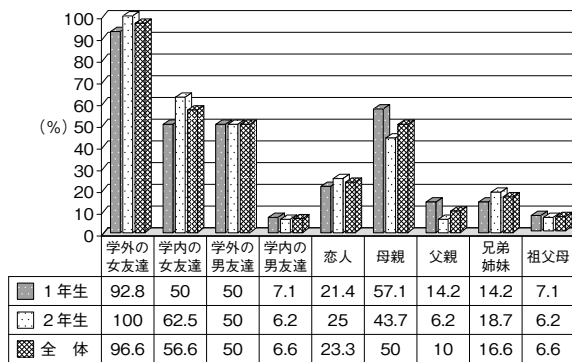


図-10 1日の受信メール回数



内の女友達が62.5%、学外の男友達が50%、学内の男友達が6.2%、恋人が25%、母親が43.7%、父親が6.2%、兄弟姉妹が18.7%、祖父母が6.2%であった。全体では学外の女友達が96.6%、学内の女友達が62.5%、学外の男友達が50%、学内の男友達が6.2%、恋人が25%、母親が43.7%、父親が6.2%、兄弟姉妹が18.7%、祖父母が6.2%であった（図-11）。先生、メル友、その他を回答したものは1年生、2年生ともいなかった。そのため、図-11では表記を省いている。

図-11 よくメールをする相手



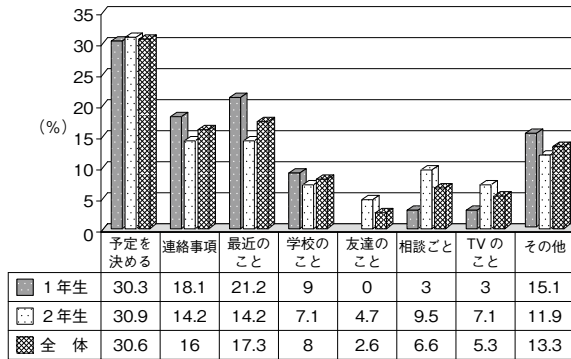
1年生、2年生ともっともよくメールするのは学外の女友達で、また半数以上の学生は男女問わず学内外の友達とメールをしている。メールする主な対象は友達のようなのである。『ケータイ白書2008』の全国調査においても携帯電話でメールのやりとりをする相手は友人が66.4%で最も多い。また、父親に比べて母親とのメールのやりとりが多い⁽³⁻³⁾。少々年齢層は下がるが2002年の16～17歳を対象にした辻大介『若者の友人・親子関係とコミュニケーションに関する調査研究概要報告書―首都圏在住の16～17歳を対象に一』によると、女子で母親とメールのやりとりをすることがあるものは48.4%、父親とメールのやりとりをすることがあるものは20.1%で、父親よりも母親とメールをやりとするものが多い。さらに、男子の母親とメールのやりとりをすることがあるものに比べて女子の母親とメールのやりとりをするものが多い⁵⁾。このことから、本学学生が女子のみであることが母親によくメールをするものと父親によくメールをするものの割合に大きな差がある原因と考えられる。

9. メールのお話

メールでよく話題にすること（複数回答）は、1年生は予定を決めるが30.3%、連絡事項が18.1%、最近のことが21.2%、学校のことが9%、友達のことが0%、相談ごとが3%、TVのことが3%、その他が15.1%だった。2年生は予定を決めるが30.9%、連絡事項が14.2%、最近のことが14.2%、学校のことが7.1%、友達のことが4.7%、相談ごとが9.5%、TVのことが7.1%、その他が11.9%だった。全体では予定を決めるが30.6%、連絡事項が17.3%、最近のこ

とが17.3%、学校のことが8%、友達のことが2.6%、相談ごとが6.6%、TVのことが5.3%、その他が13.3%だった（図-12）。予定を決めるの具体的な内容はほとんどが遊びの予定であった。

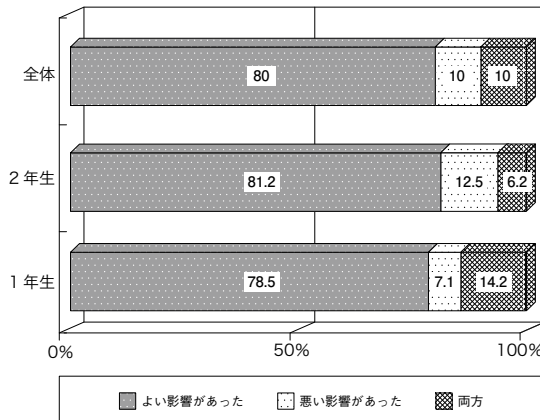
図-12 メールのお話



10. 携帯電話の人間関係への影響

携帯電話の人間関係の影響については、1年生はよい影響があったが78.5%、わるい影響があったが7.1%、両方が14.2%であった。2年生はよい影響があったが81.2%、わるい影響があったが12.5%、両方が6.2%であった。全体ではよい影響があったが80%、わるい影響があったが10%、両方が10%であった（図-13）。1年生、2年生ともほとんどがよい影響があったとしている。

図-13 携帯電話の人間関係への影響



その理由としては、1年生、2年生ともはなれていても連絡できるが1年生35.7%、2年生50%でもっとも多く、次いで1年生では新しい出会いの幅が広がったが28.5%、2年生では気軽に言いたいことが言えるが25%が多かった。また、いつでもできるからなどの意見もあった。

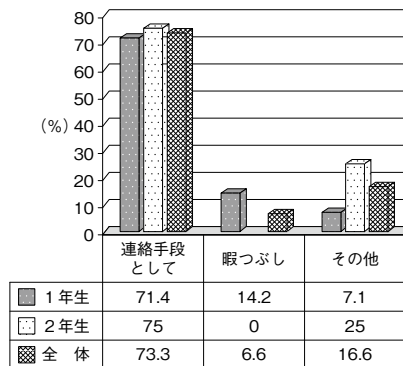
わるい影響があったとする理由では、1年生では依存症になる、返信が遅れると相手に不快感を与えている気がする、しつこいメールがある、などである。2年生では友達といるときに携帯電話を使用されると不愉快である、夜遅くにも使える、言葉の行き違いがあることなどがあげられた。

11. 携帯電話は必要か

生活において携帯電話が必要かたずねたところ、100%が必要であると答えた。

理由としては、1年生71.4%、2年生75%で連絡手段としてがもっとも多かった。1年生では暇つぶしを理由としてあげるものも14.2%いた（図-14）。

図-14 生活上、携帯電話が必要な理由



IV. おわりに

この調査の結果、以下の点が判明した。

若い世代、特に18～19歳では、携帯電話はすでに生活の一部となり、その成長の過程になくはならないものになっていることが明らかである。その使用目的の内容であるが、メールの使用が1年生のときよりも2年生になると若干多くなり、次いで通話とインターネットの使用が続いている。このことは、コミュニケーション・ツールとして、相手に容易に連絡を入れることができ、なお、メールであれば相手の都合を妨げないという携帯電話の特性が若い世代に受けていることを表している。さらに、相手の行動を妨げることなく、移動中にも数分で、たとえば人と待ち合わせなどのときに現在地をメールで知らせるなどの重要なやりとりを相互に行うことのできる点が、いそがしい現代社会を生きる若者の感覚とマッチしたのだと思われる。

1年生では親が携帯電話の代金を払っている場合が多いが、2年生になると代金の支払いは親がするものと自分がするものに約半々にわかれる。実際の使用代金は10,000～15,000円未満の学生が約半数を占めているが、時給850円程度のアルバイトを6時間行っただとしてもそのア

ルバイト料では携帯電話の使用代金の半分にも満たず、このことは学生にとって大きな負担になっていると考えられる。

メールの頻度は、大部分の学生は毎日メールを使用しており、1日1～2時間程度使用する。その時間は今までになかった青年期の現象として考えられ、また、携帯電話は若者の精神や文化にどのような影響を与え、何を育てるかまた読書をしなくなったなど、この費やした時間が何をもたらすのかなど今後の研究にゆだねたい。

つぎに、メールの相手は学外の友達が大多数である。大部分は同世代とのやりとりと考えられるので、人間関係において横のつながりが強く、その意見のほとんどを同世代間で解決しようという若者の傾向と共通する結果が判明した。これは就職しても数年後迷いが生じたとき、年長の人のアドバイスを受ける訓練がされていないが故に3年でやめる人が多いとされ、先行きの展望を持てない若者たちと呼ばれる理由とも考えられる。携帯電話によって成立する人間関係は、同世代など流行り言葉の通じる相手との関係は容易に成立するが、世代を越えては難しいといわれる。原因は、この携帯電話でやりとりをする相手が同世代であると推察されることに関連性を持つと考えられる。にもかかわらず、彼女らの願いとしてはどのような世代の人ともよい人間関係を持ちたいという気持ちが強くある。この点が、現実と理想のギャップとして絶えず彼女たちの不安定さをもたらしている。そして、彼女たちの一種の焦りとして、メールの交換を常にしていないと安定できないという、やや携帯依存の傾向が見られる点が今後の研究テーマとして残される。

【参考文献】

- 1) gooリサーチ (2006)、「子どもの携帯電話利用状況」に関する調査結果、gooリサーチ結果 (No. 108)、<http://research.goo.ne.jp/database/data/000256/>
- 2) 博報堂生活総合研究所：中村恭子・原田陽平 (2005)、10代の全部、ポプラ社、①p87、②p86
- 3) モバイル・コンテンツ・フォーラム (2007)、ケータイ白書2008、インプレスR&D、①p51、②p44、③p54
- 4) 小林哲生・天野成昭・正高伸男 (2007)、モバイル社会の現状と行方―利用実態にもとづく光と影、NTT出版、p33
- 5) 辻大介 (2003)、若者の友人・親子関係とコミュニケーションに関する調査研究概要報告書―首都圏在住の16～17歳を対象に一、関西大学『社会学部紀要』、34、(3)、p373-389